

平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：13401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K06396

研究課題名(和文)ル・コルビュジエの建築理論における古典的原理と近代的世界認識を巡る思潮研究

研究課題名(英文)On the classical principles and the modern view of the world in the architectural theory of Le Corbusier

研究代表者

白井 秀和 (SHIRAI, HIDEKAZU)

福井大学・学術研究院工学系部門・シニアフェロー

研究者番号：40206272

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：ル・コルビュジエの建築・都市計画思想を基盤として、近代人としての建築家・都市計画家像を、いかにル・コルビュジエが模索・探究してきたかを考察した。その成果は(1)ル・コルビュジエに大きな影響を与えた思想家、例えばニーチェと共有する世界観の解明(2)この世界観を基準とした、独自の建築制作や都市計画の構想についての新たなる探求(3)ル・コルビュジエの、20世紀前半の「近代的世界観」と、彼の「古典的知識もしくは素養」に基づく「古典的・正統的世界観」との、対立と融合を巡る考察(4)ル・コルビュジエの、「ヴォリューム」・「表面」・「平面」を巡る論考の中のカント的世界観を援用した「崇高」概念の解明など。

研究成果の概要(英文)：By considering his recognition of modernity, we tried to make clear the contrast to the French classical principles based on Le Corbusier's outlook on the world [view of the world]. From the studies of analyzing his own propre projects of architecture and urbanism, how Le Corbusier pursued the figure of architect and urbanist as the modern man. Results that we draw out are as follows:(1)the elucidation of his outlook on the world in common with the german philosopher Friedrich Nietzsche (2)the significance of his original works of architecture and his ideas concerning urbanism, based on this outlook on the world (3)the investigation of Le Corbusier's modern view of the world in the first half of the 20th century versus his classical view of the world resulted from his classical knowledge and culture. Also we considered Le Corbusier's notions of volume, surface and plan more deeply. As the result of this experiment, we reached the concept of sublime in architecture.

研究分野：建築歴史意匠

キーワード：ル・コルビュジエ ニーチェ 崇高 近代人 ヴォリューム 世界観 都市計画 古典

1. 研究開始当初の背景

(1)『建築をめざして (Vers une architecture)』(1923)は建築の近代化に関する宣言書として位置づけられる。ル・コルビュジエ (Le Corbusier, 1887-1965)自身は、過去と決別し近代という時代の黎明期にあって、当時の社会変動や技術革新がもたらす結果によって如何なる建築がつけられるべきかを提示した。

(2)現在でも、この著作の重要性は否定しがたい。この著作は、その邦訳が、1967年に吉阪隆正訳によって鹿島出版会から出版されて以来、34版を重ねており、さらに2003年には『建築へ』と題され、ル・コルビュジエ-ソーニエ (Le Corbusier-Saugnier)の著作とした、初版本を元にした樋口清による新訳が中央公論美術出版から出版された。また2005年にはJean-Louis Cohen監修のもと、第3版を底本とする仏語の新版がFlammarion社から出版されている。

(3)この著作を体系的に論じた研究(書)はいまだみられない。既往研究においてこの著作に関しては、概説や概略が紹介されるのみである。既往研究におけるこの著作の解釈は、その理論の近代性のみに着目するもの、古典性のみに着目するもの、芸術的側面と技術的側面との対比、感覚的判断と物質的判断との対比などであるが、常にこの著作における理論の一面のみであった。

(4)ウィトルウィウスの建築造形の六原理は近世以降ヨーロッパ建築に再現されるようになった。一方、ヨーロッパ建築、西洋建築史においては古典的伝統の継続性が示唆される。ヨーロッパでは古代ギリシア・ローマ建築(理論)を範とする建築的伝統が古典主義という一つの様式として息づいている。このヨーロッパ世界における古典的伝統として、古典主義とは別に、建築美学として、ウィトルウィウスの建築原理が取り上げられることは周知の事柄である。このウィトルウィウスの原理の受容は近代直前に幕を閉じるかのように言われ、近代建築理論はそれ以前の建築理論を踏襲することなく、独自の視点でその運動を続けるかのようなのである。

(5)『建築をめざして』の各小論がウィトルウィウスの六原理に対応すると仮説をたてた。『建築をめざして』における各章について、「レスプリ・ヌーヴォー」の各論考へと遡及し、個別の分析対象とするなかで、「三つの想起」である「量感」と「表面」と「平面」の論考と「規制線図」の論考からウィトルウィウスの六原理におけるエウリュトミアとシュムメトリアの原理を導くことができそうであり、また、「もの見ない眼」である「大型客船」と「航空機」と「自動車」の論考からウィトルウィウスの六原理におけるディストリブーティオーの原理を導くことができそうである。

本研究は、ル・コルビュジエの『建築をめざして』における建築理論が近代的世界

認識に基礎をおきつつも、伝統的な古典性の復権を意図したものであったという、ル・コルビュジエの建築論・建築術・建築観・建築像について、ウィトルウィウスの六原理に基づき新たな建築思潮を提案するものである。

以上の背景をもって、ル・コルビュジエの『建築をめざして』における理論を統一的な視点から体系的に論究するという着想に至った。

2. 研究の目的

本研究は、近代建築理論にみられる古典性を明示しようとするものである。

極めて直接的に、近代建築理論としてル・コルビュジエの『建築をめざして』の理論が古代ローマにおけるウィトルウィウスの『建築十書』の建築原理と整合する様相が解明される。既往研究におけるアプローチとは異なり、近代的世界認識に基づき構築された建築理論が如何なるものであるかを分析し、それが不可避免的に古典的原理へと遡及していくことの様相を解明する。

また、ここでは、ル・コルビュジエがウィトルウィウスの原理へと向かう直前に、近代人としての前提を、建築美学的知見から確立するための理論を考察することになる。

3. 研究の方法

本研究の中心的主題は、近世・近代フランス建築思潮研究である。

近世フランス古典主義建築理論から近代フランス古典主義建築理論の間には大きな溝がある。これを埋めるのは、美学理論としての「崇高論」として理解される理論である。とりわけ美学的「崇高」に関する最近の議論は、その臍帯となる。

これには、ウィトルウィウスの建築原理に対する知識さらには近世フランス古典主義建築理論にたいする知識が必要となる。これに加えて、ル・コルビュジエの建築思想形成に与えたニーチェの影響を考察し、「近代人」の意義を問う。ル・コルビュジエの近代的建築理論についての精緻な分析が必要とされ、膨大な既往研究の位置づけの考察が必要となる。

4. 研究成果

(1)近代人の自覚—ニーチェを読むル・コルビュジエ

ドイツの哲学者フリードリヒ・ニーチェ(1844-1900)が建築家ル・コルビュジエに与えた影響については、夙に知られている。この報告書では、若き日のル・コルビュジエがニーチェの著作、とりわけ『ツアラトゥストラはかく語りき』と『愉しき学問』による、ル・コルビュジエの思想形成について、簡単に論じてみたい。1883年にニーチェがわずか数日で書き上げた第一部を含んだ全4巻からなる前書(の仏訳、Ainsi parlait Zarathoustra)

を、彼は1908年にパリの書店で買い求めた。1907年の9月に師のレプラトニエからプレゼントされたエドゥアール・シュレの『秘儀を伝授された偉人たち』も、兄にその読書の際の至福の時を同年の1月に報告していた。ニーチェについては、この2年後に、兄や仲間たちに「ツアラトウストラが説教する男に少々とりつかれている」と語っていた。さらに、1923年ごろには、『聖なる1月』（『愉しき学問』からの1章の抜粋本）を、オザンファンからもらっていた。さて、ル・コルビュジエ（この時はジャンヌレだったが）は、これらの書物にどのように影響されたのだろうか。

『ツアラトウストラはかく語りき』を読むことによってジャンヌレは、人間の意義と宇宙の中のその存在のもろさについての議論に引き込まれた。すなわち、人間という存在は、実存という悲劇的次元を認識しながらでしか、卓越した人間の姿には到達しえないのである。ニーチェによれば、人間存在は「まだ決定せられない動物」でしかなく、その思考能力によって動物と対立する人間は、自由という観念によって自分が動物とは異なると、誤って想像してしまったのだ。この人間の無限の可能性は、人間を不安な無秩序な状態に置く（ヤスパースの「ニーチェ論」より）。自由の概念は、カント流に言えば、叡智界・可想界に属するものであり、現象界に属する自然概念とは対立する。ここで、創造意志なるものが、大いなる苦痛を前提にするとしても、結局この創造意志が苦悩を廃し、存在の真の性質に、自由によって到達するのである。というのも、人々が救済を見いだすのは、知識の中ではなく、創造行為の中においてだからである。「およそ生あるものはこれまで、おのれを乗り越えて、より高い何ものかを創ってきた」なるツアラトウストラ（ニーチェ）の言葉にあるごとく、この創造行為こそが、付箋の代わりに下線で直接強調したジャンヌレ流の『ツアラトウストラはかく語りき』読解から得た、ニーチェの人間のもつ、寛容や行動能力や無私の精神につながるのである。『ツアラトウストラはかく語りき』では、10年の洞窟生活から出たツアラトウストラが行なった、都市住民たちを前にしての説教、「兄弟たちよ、わたしはあなたがたに切望する。大地に忠実なれと」が、ジャンヌレすなわちル・コルビュジエの自ら考える創造者の姿を、呼び起こすのである。この言葉はまた、自然がコルビュジエを必ず鼓舞し、その作品の制作のただなかに彼を導き続けるよう喚起するわけである。若きジャンヌレは、こうしてツアラトウストラに刺激されて、自らの責任で、さまざまな偏見に対抗するこの哲学者ツアラトウストラすなわちニーチェの反乱を、引き継ぐのである。ジャンヌレは書く。逆説的に。「平凡なるすべてのものが称賛され、生まれかけた力のすべてに異議が唱えられる時代にあっては、ありふれた方法に付き

従おうとはしない人々こそが、頼もしい顔の持ち主（存在）なのだ」と。

『ツアラトウストラはかく語りき』に対してと同様に、ジャンヌレは、ニーチェの呪文的な訴えの数々によって、もうひとつの著作『聖なる1月』の文章に打ちのめされたようである。ここでは、虚栄心を打ち払い、徹底的に生きることのすべを心得て、知識を所持することのできた、雄々しく、孤独ながらも毅然とした人々だけが登場するのだ。疑いもなく、ジャンヌレはこうした征服せし人々（心を掴んだ人々）でありたいと願うのである。

若きジャンヌレに対するニーチェの影響は、深くまた永続的なものであり、この哲学者の著作を読むことが、このジャンヌレという創造者・建築家の歩み（ル・コルビュジエへの道）を築き上げる助けとなっていた。ニーチェを読むことが、ジャンヌレの教説群の練り上げにも直接与しているのだ。それゆえ、「世界を神格化する、世界を神聖なものとして賛美する」といったニーチェの言葉が、若きジャンヌレによる近代都市の概念形成によって、当の建築家・都市計画家ル・コルビュジエのなかで、翻案・翻訳されているのを、目の当たりにするのである。さて、ここに現われた、ジャンヌレ対ル・コルビュジエという構図は、前もって結論を言うならば、ニーチェに感動したジャンヌレが、成長してル・コルビュジエとなり、『ユルバニスム』や『今日の装飾芸術』において唱道した、多様性を帯びたロマン主義的個性を嫌悪するところの、「標準」や「均一性」や「規則」や「近代の感情」を、強く推し進めたあとに、『輝く都市』において、再び、ニーチェ的な個別性、個人主義、多様性に回帰するところの、時間的いや哲学的な推移・変遷を言い表しているのである。

建築がニーチェにとっては人間が人間であるがゆえの悲劇を認識することに寄与するという点が、必ずもって指摘されるがゆえに、上述の考察はきわめて意義がある。ここで、理解を深めるために、『聖なる1月』の中の、「認識者の建築」の一節を引こう。

現代の大都市にとりわけ欠けているものは何か。そういう洞察が、いつか、きっと早晚、必要となろう。じっくりものを考えるにふさわしい、静かで、広くて、ゆったりとした造りの場所。天井の高い、長く続く廊下をそなえていて、天気の良い日や日差しの強すぎる日にも好都合の場所。車の騒音や呼び売りの声もそこには届かず、僧侶すらエチケットに鋭敏になって、声高に祈禱するのを差し控えざるを得なくなるほどの場所。つまり、引きこもって自己省察にはげむことの崇高さが全体として表現されている建物と設備だ。じっくりものを考えることを教会が独占していた時代は、もう終わった。

(森一郎訳。)

ル・コルビュジエ流の人間は、ツアラトウストラを手本として、自然の理想に分かちがたく結びついている。ニーチェによれば、世界の始まりの時代の「工作する人」は、文明のなかで登りつめたと誤って思い込んだ末に動物に戻ってしまった本物ではない近代人よりも、価値があるのだ。ル・コルビュジエは、まさしく、その根本信条をなす「自然を活性化する秩序の精神」に逆らって新しい都市を打ち建てようと、斧で大木の樹林を切り崩す人間の混乱のなせる業に対立する、このニーチェの本質に同化したのである。

野蛮人の小屋は、ル・コルビュジエ的考察の基盤である。『ユルバニスム』の最初にも登場する。いわゆる原始・古代の社会に対するジャンヌレの熱い思いは、きわめて重要であり、『輝く都市』においても、「わたしは、野生の人を探す。それは、そこに野蛮さを見いだすためではなく、知恵を見いだすために」と述べている。ジャンヌレすなわちル・コルビュジエにおいては、自然は、秩序と同義語なのだ。現象界の自然は、こうして、現象界を統べる秩序となり、ひいては、建築が乱立する事態にあっても、統一性のもと、「自然」性を保持し続けて、世界の崩壊を食い止めるのである。さて、ニーチェにとって、人間が自然の副産物でしかないのであれば、必然的に、都市は、ル・コルビュジエにとっては、この同じ自然の「すでにして、副産物」でしかない。つまり、自然は模範的・規範的な存在なのである。とはいえ、『ユルバニスム』にあるごとく、「じかに見れば、自然は偶発的な外観でしかない」。しかし、この自然を生かす精神は、前述のごとく、秩序の精神である。かくして、自然が、秩序を欠いた人間の、第一の原因として定義づけられるのは、疑うまでもない。たとえば、自然がカオスになりうるとすれば、これによって無秩序になるのは、人間の住まう都市なのだ。かくして、ル・コルビュジエの唱える人間は、産業革命に対抗する。というのも、産業革命こそは、人間から、ニーチェの言う「超人」の威厳を得させることもなく、自然との接触を失わせたからである。「人間は、動物と超人のあいだに張りわたされた一本の綱である」という、ニーチェがツアラトウストラに語らせた有名な言葉を思い起こせばよい。ル・コルビュジエが、『生きている建築』誌において強く唱道したところの、「真理の精神 L'Esprit de Vérité」は、このことを謳っている。この人間は、その力の基盤とされる明敏さに到達し、こうした人間意識のいわば台石に則って、ル・コルビュジエは、「近代の感情」(均一性、画一性)に接ぎ木して、ニーチェ流の多様な「個性」、「個人主義」を有効に現わしたそうと試み

るわけである。だが、ニーチェ流の「優れた文明の知識」といった条件に縛られている限りは、ル・コルビュジエ流の、多様性を排した「近代の感情」は、政治的な文脈での啓蒙主義とも、相容れないであろう。ここでは、18世紀と19世紀から受け継いだところの、秩序(すなわち自然)の精神、幾何学の精神が、より重要になる。この均一的な「近代の感情」は、ゲオルク・ジンメルが言ったような、大都市という新たな現象を特徴づけている「人間の魂の諸特性の個別化の出来」に対する、いわば「解毒剤」としての効果があるといえるのかも知れない。

かくして、上述の多様性と均一性の相克にもめげずに、ル・コルビュジエは、「近代人の自覚」を、ニーチェの導きのもとに行なった。ニーチェを読むことで、ル・コルビュジエは、凡百の建築家群から、華麗に離脱したのであった。哲学書とここまで深く関わった建築家は、そうはいないであろう。激しい変革の現代にあっては、なおさらである。しかし、ル・コルビュジエは、20世紀初頭の変動期にあつて、このことを自らに、<激しく>課した。それゆえ、あの、膨大な著作が、その同じく膨大な建築とともに、現在のわれわれの探求心を、刺激し続けてやまないのであろう。

最後に、機械時代の「スケープゴート」とされて、あたかも、ハイデッガーの言う「技術による総駆り立て体制(ゲシュテル)側の人間のごとく扱われてきたきらいのある、ル・コルビュジエの、以下の言葉を添えて、この報告書を閉じたいと思う。

建築は、いま、どうなっているのか。

建築は、機械のかなたに、あるのだ!

[本稿は、本研究期間内のパリ滞在中に見いだした、R. ボドゥーイの刺激的で貴重な論考「近代(現代)人の発明」のごく一部を導きの糸として、編まれた。近々に、この論考全体をもとにした、大部の論文を執筆予定である。また、最後に挙げたル・コルビュジエの言葉は、『生きている建築』の1927年号からのものであり、「住宅は住むための機械である」のみが強調されてきたル・コルビュジエの、重要な、本来の意図を表している。]

(2)崇高としての量感、美としての表面

ル・コルビュジエによる近代的建築理論として、『建築をめざして』における「建築家各位への三つの想起」から「量感」と「表面」の章を取り上げ、分析および考察する。

『建築をめざして』としてまとめられる、「レスプリ・ヌーヴォー」の論考における第一のものは「le volume」であり、第二のものは「la surface」であった。この2論考を分析

対象として、テキストの解釈的研究とした。まずは、「レスプリ・ヌーヴォー」での記述と『建築をめざして』での記述を対照し、削除、追記について分析した。また、既往研究における個々の著者、研究者による解釈を批判し、邦訳書、英訳書、独訳書における訳語からその内容を分析した。次に、建築思潮の視点を以て、美学思想を俯瞰することから、「le volume」と「la surface」の論考において示される volume と surface の関連性について、「崇高」と「美」の関連性の視点から考察した。また、ル・コルビュジエ=ソニエによって著わされた volume と surface の語の意味内容について、場所論的、制作論的視点を以て現在の地平からも考察した。テキストの解釈によって明らかとなる理論形成の経過から、その建築美学的考察を通して volume と surface が意味するもの、それらの意味作用を浮かび上がらせることが目的である。

「レスプリ・ヌーヴォー」における「量感」の論考と「表面」の論考は、ほぼ同じ冒頭文をもつ。「量感」の論考から「表面」の論考への冒頭文の変更は、崇高性の語、またこの語を含む一文の削除と、象徴の語の削除の2箇所のみであった。しかしながら、崇高性の語を含む一文が削除されたとしても、論考の内容自体に変わりはなく、建築は、その抽象作用によってつまりその客観性によって、非常な高み即ち崇高へと、人間の能力や本能を刺戟する、ということがまずは想起させられていた。

この冒頭文においては、「生の事実」が問題となる。この生の事実を通して、人間の精神は、今正に、そこから理念を推論しようとしているのであり、そのことにおいて理性的である。未だ理念化されていない物体としての生の事実、可能態であり、現象から理念へと移行させられようとしている意味で契機である。さらに、生の事実、そこから推論された理念から建築としてももう一つ別の物体となる際には目的である。こう捉えると、正にそこにある物体即ち崇高な、生の事実であり、これの理念化からの建築としての物体化がめざされ、それによってのみ、建築を喚起する情動が発動することになる。つまり、この意味において、生の事実、その理念化によって即ち建築的な抽象作用、秩序（化）によって、物体を制作しようとする際には、その契機、端緒であると同時に目的、めざされるものである。

続く文からは、要素以前の状態ないしは要素になり得る量感と表面がある、ことがわかる。建築が出現しない場合、量感と表面は現前せず、またそこに建築が出現した場合、量感と表面は既に要素である。生の事実から理念化しようとする最初に量感と表面が構想され、量感と表面は、建築が出現する場となり、その時には既に要素である。失われる、消えゆくものとしての量感と表面であり、理念としての量感と表面である。

PREMIER RAPPEL: LE VOLUME の見出しが副題のように附され、第一の想起が量感であることが示される。

最初の一文は「建築は、光のもとに集められたさまざまな量感の巧みな、規則に適った、壮麗な遊動〔遊び〕である」である。

これまでの解釈では、初等形態や幾何学的形態の採用や使用を重点的にみているのは明らかなのだが、それ以前に、より常識的に、ル・コルビュジエ=ソニエの言説からは、建築は光のもとに量感の遊動〔遊び〕であることを容易に読みとることができる。量感の次には形態が呈示される。この形態は、光による啓示、眼に対する明瞭性、視覚的明瞭性つまりは感性的判断から初等形態に限られ、その判断はその像、心像が美しい形態であり、もっとも美しい形態であることを根拠としている。感性的判断を美的判断として、量感、形式を賦与され、初等形態として可視化されるのであり、形態は、初等形態に抽象されることによって物体化するのである。美の問題として、光のもとに量感とは、ヴェールを剥がされる初等形態であり、初等形態は抽象化された第一次形態である。崇高な、生の事実から、まずは量感と表面が構想され、量感からは形態が、形態の抽象化からはヴェールを剥がされる初等形態が呈示され、この初等形態が美しい形態であり、もっとも美しい形態なのである。

SECOND RAPPEL: LA SURFACE が副題のように附され、第二の想起が表面であることが示される。

「建築は、光のもとに集められたさまざまな量感の巧みな、規則に適った、壮麗な遊動〔遊び〕である」は、既出の命題である。私たちはこれを、建築は「光のもとに量感の遊動〔遊び〕」として読みとったのであり、これに続けて建築家の責務は、そのような量感を包み込む表面を生かすことであることを知る。表面は量感を包み込むものである。

建築は実際の建物になる。ここで、建築は建物として物体化し、物体化からの建築の不可避性の到着点に至る。建築という理念は住宅や寺院や工場とは別の事柄であり、表面は寺院や工場の壁とは別の事象である。従って、建築は住宅や寺院や工場になるのであり、孔の開いた壁が形態として現れる時、表面は壁である。壁は一般に建築要素である。表面は失われ、消えゆく、表面が消えゆくそこに要素としての壁が現前化することになる。現象としての壁の誕生である。つまり、表面から壁が誕生するのであり、表面は、壁以前の理念であり、第一義的には量感を包み込むものでしかない。

表面の論考の後半部分では、生成するものと成育するものについて記されている。生成するものが平面であることは、冒頭文に明記されている。平面が生成因、原因であるとすれば、ここで問題になるのは成育するものである。成育するものには、直接明記される形

態と量感が関わる。「量感」の論考では、量感_は形態として呈示され、形態は美しい形態である初等形態に抽象されていた。続けて、「表面」の論考では、量感を包み込む表面が、建築要素としての壁となつて、建物となつて現前した。平面から壁の現象に至るその過程には、量感-形態-初等形態=美しい形態があり、表面-壁がある。またこれらは「光のもとの量感の遊び」から「量感を包み込む表面」への展開過程でもある。壁の現前化は原因としての平面から起こる結果であり、平面から量感と表面が生成するのであるとすると、その到着点(その結果)が壁であり、建物である。量感に発する形態-初等形態=美しい形態は、量感を包み込む表面に発する壁に至る過程における幾何学的成育である。これが生成する平面から成育するもの、純粹幾何学による幾何学的発展となる。

「量感」から「表面」への論考にみてきた理論的経過のなかから「光のもとの量感の遊び」と「量感を包み込む表面」とを volume と surface の語の意味するものを考察するための要点と見定め、美学的「崇高」の観点からその内容に迫る。

理念である量感からは、形式の問題へと移行し、鮮明で触知でき曖昧さがない心像として美しい形態が導かれ、それは視像としての初等形態であった。生の事実から量感と表面が構想され、理念化と物体化の間の生の事実から理性によって推論された理念としての戯れる量感、感性における多様なものは、構想力のように感性と悟性の間であり、崇高な生の事実からもう一つ別の事実即ち造形的な、明瞭な、清澄な事実を創造しようとしているのである。美学的崇高にあつて、光は現れることの単なる輝きである。ル・コルビュジエ=ソニエの論考にある光は、すべてを露にすることから単純なるものを現出させた。美しい形式である初等形態は、光のもとで、量感として顕現する。光はヴェールを剥ぎとる作用でもある。光のもとの量感_は、ヴェールをまとう限りにおいて美的理念であり、光の作用は初等形態のヴェールをとることである。美学的崇高にあつては、ヴェールの奥には崇高があり、崇高は感性と悟性の二つの世界の継ぎ目を示している。これが崇高としての量感である。

包み込むものは表面であり、表面は量感のヴェールとなる。現れるために、表面による包み込みによって量感_はは限定づけられる。量感_はは限定づけられなければならない、そのための表面が思考されていると捉えると、限定づけられないものとしての量感という理念があることになる。表面が包み込んでいるものが感覚質としての量感であるならば、量感を包み込む表面とは、限定づけられないものとしての量感と限定するものとしての表面という関係性となる。そしてその時、限定する表面は限定づけられないものとしての量感の境界である。これが美としての表面である。

結論として、量感と表面が総合することをみておきたい。

美学的崇高の観点からの考察に限っては、限定づけられない量感とそれを限定づける表面という観点から、崇高としての量感、美としての表面という関係性が導かれたことになる。

量感を包み込む表面から、表面の消えさるそこに壁が現前化するのであった。量感と表面は共に消えゆき、そこでは量感と表面が消えゆくことによって、建築構成要素としての壁が現れる。即ち、壁という現れが量感と表面の総合そのものなのであり、壁が総合的形態として呈示されることになるのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

村田一也、北陸宗教文化第29号：書評：「建築論研究会編『建築制作論の研究』」、北陸宗教文化学会、103-112頁、平成28年3月。査読無。

〔学会発表〕(計6件)

村田一也：「ル・コルビュジエ=ソニエによる「Trois rappels à MM. les architectes」と「Les tracés régulateurs」について」、第39回建築論研究会、京都大学大学院人間・環境学研究科棟4階433演習室、2017、3、26

村田一也：ル・コルビュジエによる「表面」と題された論考、日本建築学会北陸支部研究報告集、第60号、pp.595-598、2017、7

村田一也：ル・コルビュジエによる「平面」と題された論考、日本建築学会北陸支部研究報告集、第60号、pp.599-602、2017、7

村田一也：ル・コルビュジエによる「規制線図」と題された論考、日本建築学会北陸支部研究報告集、第60号、pp.603-606、2017、7

笹島克弥、村田一也：International styleにおける volume をめぐって、日本建築学会北陸支部研究報告集、第60号、pp.607-610、2017、7

村田一也：ル・コルビュジエによる「量感」と題された論考、日本建築学会北陸支部研究報告集、第59号、pp.649-652、2016、7

6. 研究組織

(1) 研究代表者

白井秀和 (SHIRAI, Hidekazu)

福井大学・学術研究院工学系部門・シニアフェロー

研究者番号：40206272

(2) 研究分担者

村田一也 (MURATA, Kazuya)

石川工業高等専門学校・その他部局等・准教授

研究者番号：90360859